

日本は無痛分娩の発展途上国？

文
北川道弘

text by Michihiro Kitagawa

医療法人財団順和会山王バースセンター院長
国際医療福祉大学臨床医学研究センター教授

出生率1.42を考える

日本における合計特殊出生率（一人の女性が生涯に産む子供の数）は1.42と3年連続で低下しています。先進国の中でも少子化傾向であるとともに妊産婦の高齢化も顕著となっています。また、陣痛の痛みを恐れ妊娠を躊躇する方も少なくございません。日本では昔からお産の痛みに耐えることが美德とされ、児への愛情が高まるとの考えが根強く、無痛分娩を選択すると周囲の方たちから軽視されることもありま

す。陣痛の痛みは指の切断時の疼痛に匹敵し、癌性疼痛や腰痛、骨折を上回る痛みと考えられており、想像を絶する痛みであろうと推察されます。この激しい痛みを取り除く方法として硬膜外麻酔を用いた無痛分娩が発展してまいりました。先進各国の無痛分娩の状況は報告により差はありますが、概ねフランスでは約80%、米国では60~70%、韓国でも30~40%であるのに対し、日本では3~5%と著しく低い実施状況です。日本では産科麻酔医が少なく、

産科麻酔医の育成が今後の無痛分娩を広めるうえでの課題と考えます。私も山王バースセンターでは95%以上の妊婦さんが無痛分娩を選択し、産科麻酔医のもと効果の高い安全な無痛分娩を行っております。

最近、無痛分娩による事故がマスコミに大きく取り上げられ、社会問題となりましたが、産科麻酔医や麻酔に精通した産科医のもとで適切に行われれば決して危険な医療行為ではないと考えられます。無痛分娩の長所と欠点を表に示しましたが、欠点の多くは麻酔

剤によるものが多く、対処可能な問題と考えます。妊婦さんにとって安全で痛みのないお産は理想であり、分娩の痛みを恐がっている女性のためにも、今後ますます無痛分娩が広まっていくことを期待しております。

無痛分娩の長所と欠点

長所

- 1.身体的ストレスの軽減
(呼吸器、循環器への負担軽減)
- 2.精神的ストレス軽減
- 3.母体の疲労度軽減
- 4.胎盤血流量増加
- 5.会陰の伸展効果
- 6.緊急時に帝王切開への移行が容易

欠点

- 1.陣痛微弱による分娩時間の延長
(陣痛促進剤の使用頻度が高い)
- 2.器械分娩率の増加
- 3.頭痛、腰痛
- 4.発熱
- 5.一過性低血圧
- 6.費用

Profile

慶應義塾大学工学部応用化学科中退
1974(昭和49)年3月 東京慈恵会医科大学卒
1986(昭和61)年8月 東京慈恵会医科大学産婦人科 講師
1991(平成3)年8月 米国南カリフォルニア大学分子生物学教室留学
1995(平成7)年9月 東京慈恵会医科大学産婦人科学教室 助教授
1995(平成7)年9月 国立大蔵病院 産科医長
2004(平成16)年11月 国立成育医療センター周産期診療部部长
2005(平成17)年1月 東京慈恵会医科大学客員教授兼任
2008(平成20)年4月 国立成育医療研究センター副院長
2013(平成25)年4月 山王病院副院長
2016(平成28)年4月 山王バースセンター院長

